

ねCTVから15mmの範囲内、左方向に関しては20mmの範囲内であったが、腹側方向では9%、尾側は7%の頻度で20mmをこえる偏位・変形が検出された。【結語】コーンビームCTを用いた胃の偏位、変形の検証は有効であった。呼吸性の頭尾側方向の移動に加え、腹側方向での変形が大きい症例もあり、左右方向のビームを用いるときには特に慎重に検証する必要があると考えられた。

### 〈一般演題III〉

座長 中島 陽子 (群馬大医・附属病院・看護部)

#### 9. 子宮腔内照射を受ける患者の苦痛と不安の要因と看護介入の検討

塩川 忠徳, 中島 陽子, 井上エリ子

(群馬大医・附属病院・北6階病棟)

【目的】子宮腔内照射を行う患者の苦痛と不安の要因を明らかにし、腔内照射を受ける患者に対する有効な看護の方法を検討する。【対象と方法】子宮腔内照射を受ける患者1名に半構成的面接を行い、その結果を質的帰納的に分析した。【結果】患者の苦痛と不安の要因は、〈鎮痛剤と下腹部痛に対する不安〉、〈治療中の腰痛〉、〈ブゾ診の不安〉、〈医療者への希望〉等8つのカテゴリーが抽出された。1回目の治療では治療のイメージ化ができていない中で治療による疼痛を経験し苦痛と不安があったが、患者の希望と疼痛に合わせて鎮痛剤を投与することにより鎮痛効果が得られた。【まとめ】患者の希望や苦痛の状態により鎮痛剤の投与を工夫・調節すること、治療開始前には治療の内容を具体的にイメージ化できるようなオリエンテーションを行うこと、治療がスムーズにでき患者の不安を軽減するためには、病棟と治療室との連携が必要であることが明らかになった。

#### 10. 乳房温存療法後の患者のQOL及び身体的変化についての実態調査

小俣 明子, 福田 淳子, 茂木百合子

(群馬県立がんセンター)

放射線・内視鏡外来看護師)

玉木 義雄 (同 放射線科)

【目的】放射線療法を受けた患者のQOLを評価し、身体的変化について実態を調査した。【対象・方法】平成19年5月から平成20年8月の期間に、乳房温存療法を受けた患者100例にアンケート用紙を郵送。日本で使用できる乳癌患者用のQOL尺度のなかで、QOL-ACD-B<sup>3)</sup>の調査票に、乳房の変化と、身体症状で気にな

ることについて記載の項目を追加し、調査。【結果・考察】66名から回答あり。全体的には74.9点という高得点でQOLが高いという結果だった。しかし、胸、腋の痛み、しびれがある、傷痕や胸の形に満足していない、皮膚症状が気になる、痛みがある、については個人により満足度の差が伺えた。乳輪の変化については、色素沈着が多いものの、脱色の症例もあり、起こりうる副作用として情報提供が必要と思われた。

#### 11. 群馬大学重粒子線治療電話相談の現状と今後の課題

中島 陽子, 篠田 静代, 加藤 康子

秋和 香代, 井上エリ子

(群馬大医・附属病院・放射線科外来)

大野 達也

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

【目的】重粒子線治療電話相談の件数及びその詳細を把握し、今後の運営に関する課題を明確にする。【方法】平成20年10月から平成21年1月末までの電話相談の件数、相談内容、相談者の背景などを集計し分析。【結果】合計81件の相談があり、1件当たりの相談時間の平均は7.3(2-20)分で、相談内容のほとんど(61件)が重粒子線治療の適応に関するものであった。相談患者のがんの部位は肺がんが13名と一番多く、次いで大腸がん、前立腺がんであった。相談の結果は、用件済みが29件、折り返し電話をしたもの14件で、そのうち適応なしと考えられるものが19件であった。相談を知った経緯は、インターネットが一番多かった。【まとめ】件数が増加していることや、1件あたりの相談時間が長いことなどから、外来での相談業務の改善が必要であることが示唆された。また適応外となった患者のフォローも課題である。

### 〈一般演題IV〉

座長：江原 威 (群馬大医・医・腫瘍放射線学)

#### 12. 婦人科がんに対する<sup>62</sup>Cu-ATSM-PETの初期経験

清原 浩樹, 加藤 真吾, 大久保 悠

吉川 京燦, 岩川眞由美, 鎌田 正

(放射線医学総合研究所)

重粒子医学センター)

大野 達也, 田巻 倫明

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

【背景・目的】腫瘍の低酸素は治療に対する反応性や予後の悪さと関連している。<sup>62</sup>Cu-ATSM (<sup>62</sup>Cu-labeled Diacetyl-Bis (N<sup>4</sup>-Methylthiosemicarbozone)) は選択的に